

時空を

超えて

市原市ちはら台の発掘ものがたりー



ごあいさつ

千葉県では、年間450件ほどの発掘調査が行われ、房総各地の歴史と文化を伝える貴重な成果が数多く得られております。

こうした貴重な成果を、多くの皆様にわかりやすくご覧いただくため、平成13年度から出土遺物巡回展「房総発掘ものがたり」を開催しております。本年度は、房総の多くの遺跡の中で質量ともに傑出した存在である草刈遺跡をはじめとした市原市ちはら台地区の遺跡群に注目し、「時空を超えて－市原市ちはら台の発掘ものがたり」と題しまして、豊富な資料をもとにその特色などを具体的にご紹介いたします。

本展覧会の開催に当たり、ご協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心からお礼申し上げます。

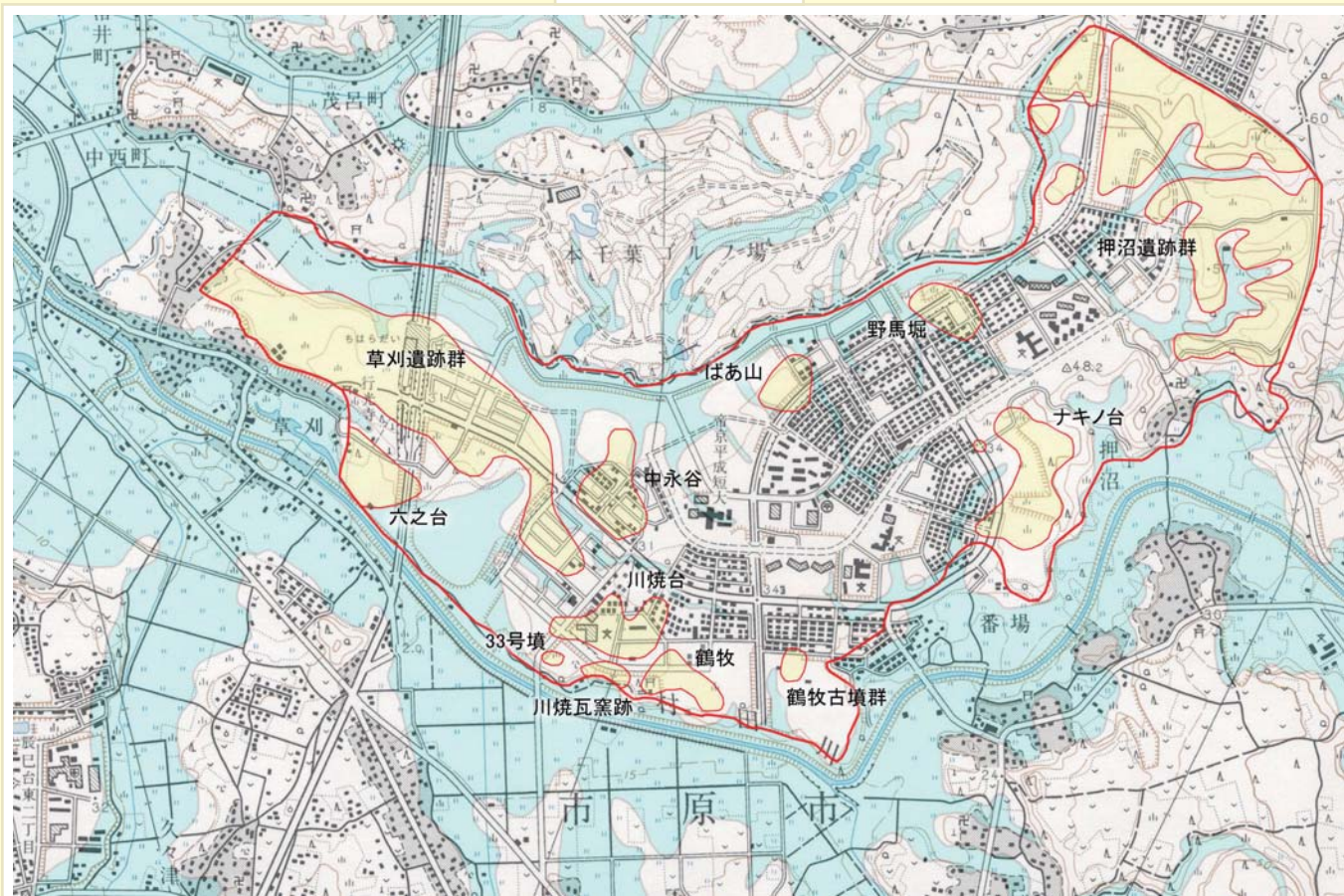
平成24年8月4日

公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター長 大原 正義

凡例

- ① 本書は、平成24年度出土遺物巡回展の展示解説図録です。
- ② 展示資料は、会場によって異なる場合があります。
- ③ 本書掲載の写真や挿図の提供あるいは転載については、本文中に明記しました。
- ④ 本展覧会の企画は、管理普及部長加藤修司の総括のもと、普及資料課長栗田則久・上席主任文化財主事森恭一が担当し、図録の執筆及び編集は栗田が行いました。

ちはら台の遺跡分布図





ちはら台 地区の 遺跡

ちはら台は、現在の都市再生機構（UR）によって昭和50年代初め頃から開発が始まりました。調査時点では、千原台ニュータウンと呼称されていました。これに伴い、地区内の12の遺跡が発掘調査の対象となりました。その総面積は約87ヘクタール（東京ドーム18個分ほど）にも及んでいます。発掘調査は平成10年に終了し、多くの資料の整理及び報告書刊行作業を行い、平成24年にすべての作業が終了することとなりました。

調査の結果、旧石器時代から中近世までの多くの遺構や膨大な量の遺物が発見されました。約3万5千年前にこの台地上に人々が住み始め、その後連綿とした生活が営まれていたことが明らかとなりました。発掘調査によって見つかった竪穴住居跡は約4千軒、古墳は約170基にも及び、県内のみならず全国的にも有数な大規模集落が広がっていました。



ちはら台 の年表

西暦年	世紀	時代名	社会の主なできごと	ちはら台の主なできごと		
-35000		旧石器時代	氷期が続く 採集や狩りをしながら移動生活をする	ちはら台に人々が住みはじめる		
-29000						
-28000						
-10000		縄文時代	土器がつけられる	たて穴住居がつけられる		
-9000	早期				採集や狩りの生活が続く 最古の貝塚ができる	
-8000	前期				集落がつけられる	小さな貝塚ができる
-7000						
-6000						
-5000	中期	大きな貝塚、集落ができる	草刈貝塚ができる ムラがつけられる			
-4000	後期	大きな貝塚、集落ができる	草刈貝塚ができる ムラがつけられる			
-3000						
-2000	晩期	大きな貝塚、集落ができる	草刈貝塚ができる ムラがつけられる			
-1000						
-700	前7世紀	弥生時代	稲作、金属器の使用が始まる	草刈遺跡の西部に周囲を溝で囲む ムラができる（環濠集落）		
-600	前6世紀					
-500	前期				各地に農村ができ、定住がすすむ	
-400						
-300	中期				房総半島でも水田がつけられ 始める 環濠集落がつけられる	
-200						
-100						
0	後期				各地に小さな国ができる 稲作の発展随分、身分などに 格差が大きくなる	草刈遺跡のムラが東部へ大きく 拡大する
100	1世紀				各地で争いが続く	草刈遺跡のムラが東部へ大きく 拡大する
200	2世紀				各地で争いが続く	草刈遺跡のムラが東部へ大きく 拡大する
300	3世紀	各地で争いが続く	草刈遺跡のムラが東部へ大きく 拡大する			
400	4世紀	各地で争いが続く	草刈遺跡のムラが東部へ大きく 拡大する			
500	5世紀	古墳時代 飛鳥時代	239年 邪馬台国の女王卑弥呼明帝より 銅鏡100枚を下賜（魏志倭人伝） ヤマト王権の統一がすすむ	草刈遺跡に方墳や前方後方墳が つけられる		
600	6世紀	古墳時代 飛鳥時代	ヤマト王権の中心地に 巨大古墳がつけられる	鉄の道具や須恵器など朝鮮半島から 伝わった新しい文物が草刈遺跡のム ラで広まる		
700	7世紀	古墳時代 飛鳥時代	聖徳太子の政治 仏教ひろまる	草刈遺跡のムラはさらに発展し 大型の前方後円墳や多くの円墳 が築かれる		
800	8世紀	奈良時代	645年大化の改新 710年平城京遷都	草刈遺跡のムラはさらに発展し 大型の前方後円墳や多くの円墳 が築かれる		
900	9世紀	奈良時代	794年平安京遷都 貴族による政治がつづく	草刈遺跡のムラはさらに発展し 大型の前方後円墳や多くの円墳 が築かれる		
1000	10世紀	平安時代	794年平安京遷都 貴族による政治がつづく	草刈遺跡のムラはさらに発展し 大型の前方後円墳や多くの円墳 が築かれる		
1100						
1200						
20世紀	平成時代	1989年	1989年	ちはら台ニュータウン造成がはじまる		

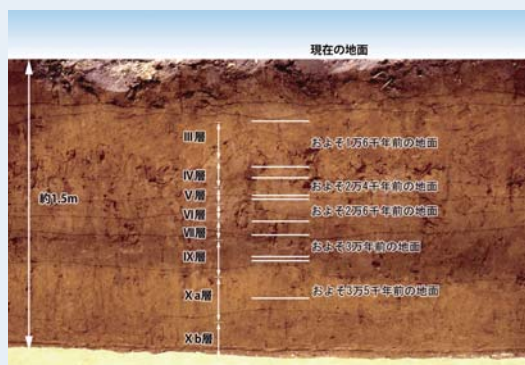
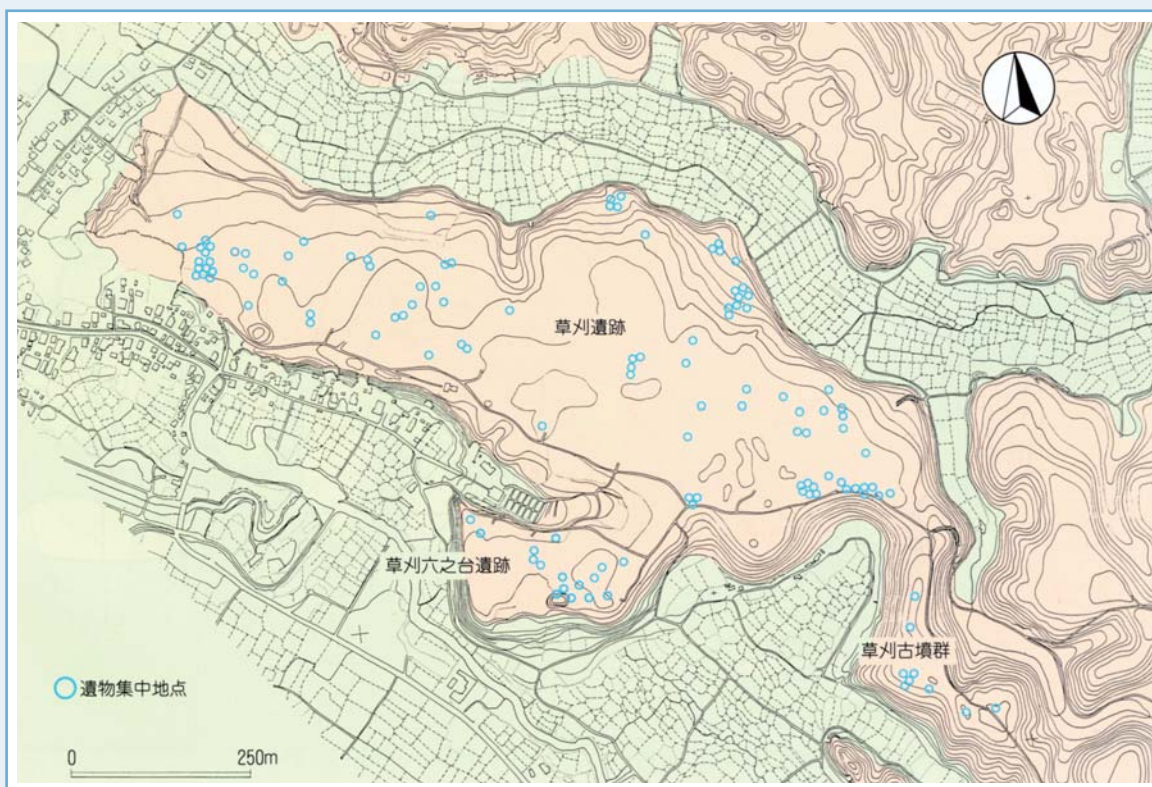
旧石器時代

—台地に人々が住み始めた頃—

旧石器時代とは、1万年以上も前の氷河期の時代に、今では絶滅してしまった動物（例えばナウマンゾウやオオツノジカ）を狩り、木の実などを採取して人々が暮らしていた時代です。氷河の時代は、今よりも寒冷な「氷期」と温暖な「間氷期」とが数万年ごとに繰り返されてきました。

ちはら台に人々が住み始めたのは、約3万5千年前の最後の「氷期」にあたります。その後、約1万2千年前までは寒冷な「氷期」が続き、最も寒いときは平均気温が今より7℃も低くなり、千葉市が現在の札幌市のような気候になったと考えられます。このような気候の中で、人々は動物を狩り、木の実などを採取しながら、定住することなく季節的に移動する生活を送っていたようです。

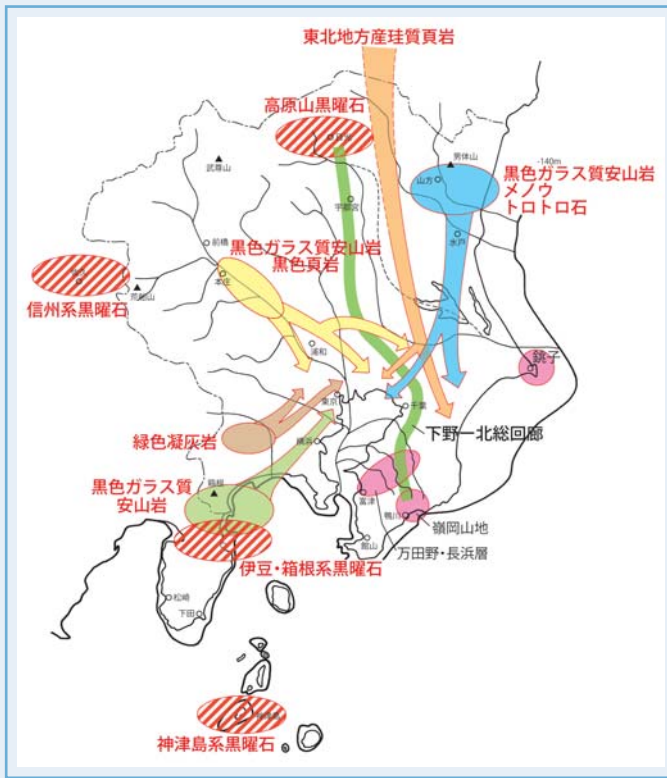
移動の範囲は、ちはら台から見つかっている石器から想像することができます。石器の材料として、長野県や栃木県の黒曜石、群馬県の安山岩、栃木県や東北南部の頁岩など県外各地の岩石がたくさん使われていました。千葉県内では入手困難な石材を確保するために、当時の人々は関東を超えた広い範囲を移動していたのかもしれません。



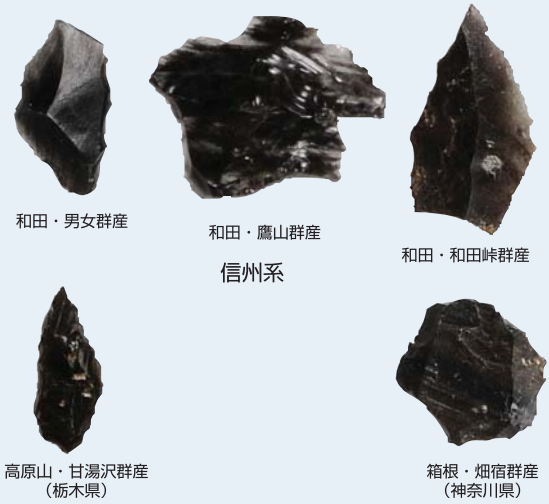
立川ローム層の層位 (参考例：柏市原山遺跡)

草刈遺跡とその隣接地の遺跡では、約3万5千年前の武蔵野ローム層上部から約1万6千年前の立川ローム層最上部にかけての10枚の文化層から、ブロックと呼ばれる石器集中地点130カ所以上、総数18,000点にも及ぶ大量の石器が出土しています。

このなかでは、草刈遺跡C区から県内最古の石器群がみつき、草刈六之台遺跡では、X～IX層上部にかけて、石斧を伴う3枚の文化層が確認されました。



関東地方における石材原産地と移動ルート
(公財) 印旛郡市文化財センター2004より転載 (一部改変)



各地の黒曜石 (参考例: 柏市原山遺跡)

県内で多くの石材を入手することは極めて限られていたため、それを追い求めて関東のみならず、信州や東北南部まで拡大していったことが遺跡から発見された石器の観察から知ることができます。

【県内最古の石器群】

草刈遺跡C区では、武蔵野ローム層最上部から1カ所の石器集中地点が見つかりました。

せんとう き はくへん せつかく
尖頭器や剥片・石核など

約30点が直径3mほどの円形の範囲にまとまっており、その石材は、内部が灰緑色の珪質頁岩と暗褐色の頁岩がほとんどです。



【ちはら台から見つかった石器】

右表のように、ちはら台の各遺跡から長野県や北関東・東北などの各地の岩石が石器を作るための材料として持ち込まれています。

番号	遺跡名	出土層位	文化層	種類	石材
1	押沼第2遺跡	VI層	第3文化層	ナイフ形石器	黒曜石 (信州産)
2	押沼第2遺跡	VI層	第3文化層	ナイフ形石器	黒曜石 (信州産)
3	押沼第2遺跡	VI層	第3文化層	ナイフ形石器	黒曜石 (信州産)
4	押沼大六天遺跡	IX層	第1文化層	ナイフ形石器	頁岩 (北関東産)
5	押沼大六天遺跡	IX層	第1文化層	ナイフ形石器	頁岩 (北関東産)
6	押沼大六天遺跡	IX層	第1文化層	ナイフ形石器	頁岩 (北関東産)
7	草刈遺跡C区	VI層	第5文化層	ナイフ形石器	頁岩 (東北産)
8	押沼第2遺跡	IV層～III層	第5文化層	ナイフ形石器	頁岩 (東北産)
9	押沼大六天遺跡	IV層	第3文化層	ナイフ形石器	頁岩 (産地不明)
10	川焼台遺跡	III層	第3文化層	槍先形石器	頁岩 (千葉・嶺岡産)
11	草刈遺跡C区	IV層下	第6文化層	ナイフ形石器	黒曜石 (信州産)
12	草刈六之台遺跡	IX層	第2文化層	台形石器	黒曜石 (神津島産)
13	川焼台遺跡	III層	第3文化層	槍先形石器	頁岩 (東北産)
14	草刈遺跡M区	黒色土	—	有茎尖頭器	凝灰岩
15	草刈遺跡M区	III層～黒色土	—	槍先形石器	安山岩
16	押沼第1遺跡	VII層～VI層	第2文化層	削器	頁岩 (東北産)
17	押沼大六天遺跡	IV層	第3文化層	搔器	頁岩 (千葉・嶺岡産)
18	草刈六之台遺跡	IX層	第3文化層	石刃	黒曜石 (信州産)
19	押沼大六天遺跡	IV層	第3文化層	石刃	メノウ
20	草刈遺跡C区	VI層	第5文化層	石刃	頁岩 (東北産)
21	草刈六之台遺跡	X層	第1文化層	刃部磨製石斧	蛇紋岩
22	草刈六之台遺跡	X層	第1文化層	刃部磨製石斧	凝灰岩

時空を
超えて

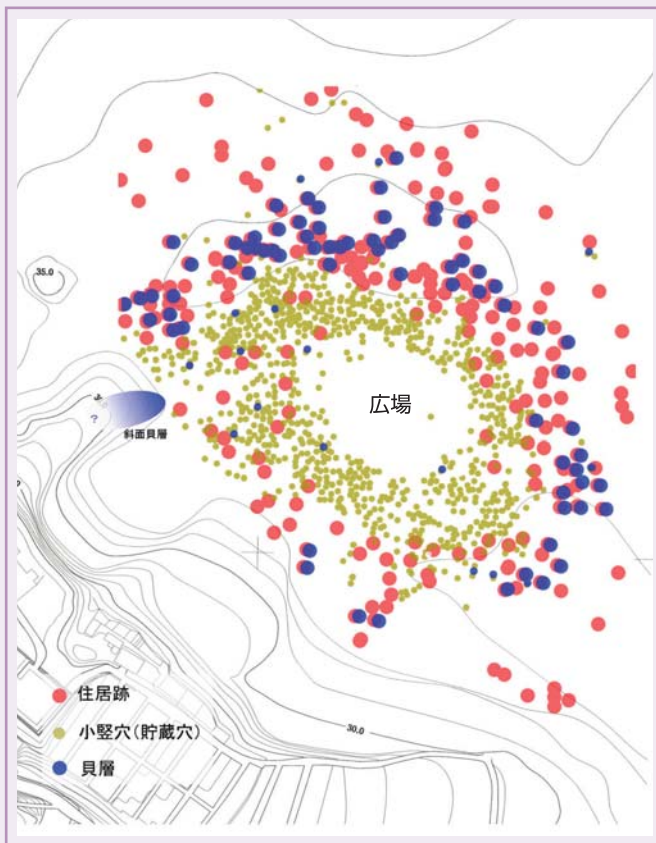
—市原市ちほらの発掘ものがたり—

縄文時代

—約4,700年前の貝塚と大きなムラ—

旧石器時代からの移住生活は、ちほら台では縄文時代早期（今から約8千年前）頃までつづき、前期には小さなムラが作られるようになりました。ところが、中期中葉頃（今から約4,700年前）に突如として大きなムラが現れてきました。大きな貝塚を伴うことから「草刈貝塚」と呼ばれています。中央の広場を囲むように貯蔵用と思われる小竪穴などがめぐり、その外側を囲むように竪穴住居が広がっています。このようなムラを、その形状から「環状集落」と呼び、この時期、主に東京湾沿岸にこのような集落が集中して営まれていました。

草刈貝塚のような大きなムラを継続させるには、集団を統率するようなリーダーの存在が必要でした。そのことは、当時きわめて貴重であった装身具類の発見などから想像することができます。この貝塚では、装飾された鹿角製の腰飾りやリーダーの所有物と思われるヒスイ製のたいしゆ大珠などが出土しています。



【草刈貝塚の環状集落】

長径130m、短径70mの範囲に帯状に遺構群が集中し、竪穴住居群は外側、小竪穴などの土坑群は内側に配置される傾向にあります。見つかった竪穴住居は約300軒、土坑は1,000基以上にも及びます。貝層は、住居内に堆積したものがほとんどです。



縄文時代中期中葉の貝塚と主要遺跡分布

『千葉県歴史資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』P197より転載



【埋葬】

竪穴住居跡21軒、土坑6基から合計46体の埋葬人骨が発見されました。

遺体に伴って装身具が見つかった例は5体で確認され、草刈遺跡B区202号竪穴住居跡の埋葬人骨の腰部には鹿角製の飾りが装着されていました。



鹿角製腰飾り



【さまざまな装身具】

草刈遺跡B区516号竪穴住居跡から6体の埋葬遺体とともにイノシシ牙製の腕輪や骨製のヘアピン、鹿角製の腰飾りなどの装身具が出土しました。この他に、多量の鳥獣骨や魚骨・貝殻などの多種多様なものが見つかり、屋内埋葬に日常生活での廃棄物が伴う点は、当時の埋葬に対する観念を考える上で重要な例です。



【中期の土偶】

草刈遺跡H区の597号竪穴住居跡から出土した阿玉台式あたまだいの板状どくわうの土偶です。この時期の土偶は、利根川流域に集中する傾向が強く、東京湾岸では珍しいものです。

【リーダーの大珠】

中期を代表する装身具で、列島のほぼ全域に分布しています。産地は、富山県との県境に近い新潟県糸魚川市姫川上流域にあります。ヒスイ製大珠の製作遺跡はこの地域に限られていることから、この付近で独占的に製作され、全国に流通したものと考えられています。これまでの調査例からは、胸につり下げられていたようで、1遺跡内の点数がわずかであることから、きわめて限られた人物（リーダー）が所有していたものだったのでしょう。



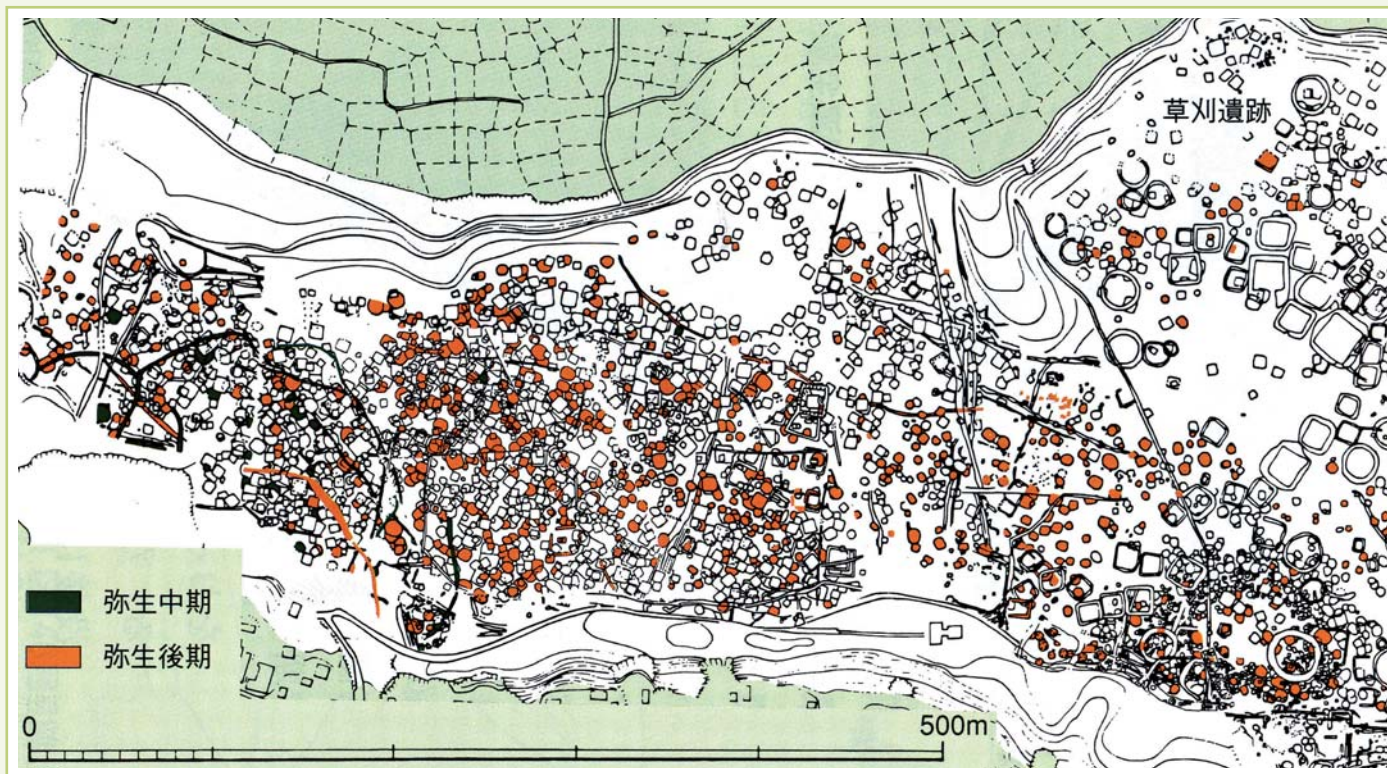
弥生時代

—先進文化の広がり—

今から3,000年前頃、朝鮮半島から九州へと伝わった稲作づくりは、急速に東へと広がっていきますが、房総半島にこの文化が伝わってきたのは、2,200年前頃と考えられています。草刈遺跡からは当時の水田の跡は発見されていませんが、台地上には大規模な集落（ムラ）が出現しており、おそらく近くの谷や低地に水田を作って安定した生活を送っていたものと推測されます。

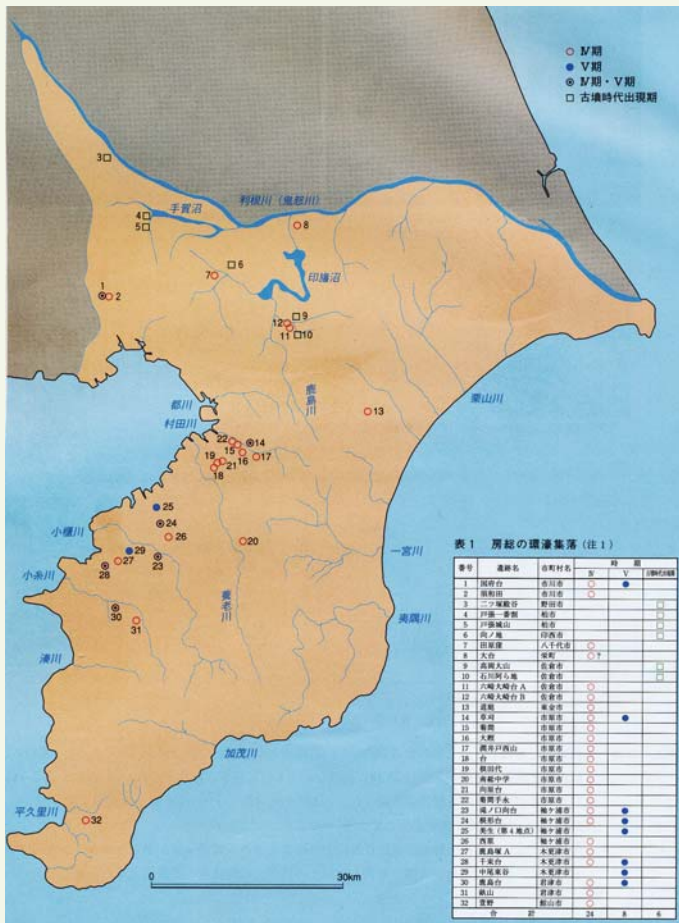
弥生時代のムラは、草刈遺跡の西側、現在のちはら台の西端あたりから作り始められるようになりました。この頃の大きな特徴としてあげられるのが「環濠集落」と呼ばれるムラの形です。環濠集落とは、周囲に堀をめぐらせた集落のことで、稲作の技術とともに大陸からもたらされた新しい集落の境界施設と考えられています。この時期、草刈の地にも西の文化が伝わり、縄文時代とは異なった新しい大きなムラが営まれたのでしょうか。

西からの文化は生活にも大きな影響を与えています。その一例が占いの儀式に使われた「卜骨」です。鹿の肩の骨に焼いた棒を当て、その割れ目の形から吉凶などを占うものです。邪馬台国の女王「卑弥呼」も行っていたといわれ、草刈の集落にも祭祀（マツリ）を掌握していた司祭者のような特別な人がいた可能性があります。また、弥生時代も終わり頃になると、西の文化の象徴でもある銅鐸をまねた「小銅鐸」が草刈の地で使われるようになります。これもマツリや権威の印として所有していたのでしょうか。



【草刈遺跡のムラの広がり】

草刈遺跡のムラは、環濠を伴った比較的小規模な集落が西側から作られはじめ、その後徐々に東側に広がっていき、きわめて大規模なムラとなった様子が見て取れます。



房総における環濠集落の分布「千葉県歴史資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)」P516より転載

環濠集落とは、断面V字形に掘られた大きな溝を巡らせて特定のエリアを区画したムラを指し、北部九州から関東・北陸地方まで広い範囲に分布しています。その性格については、従来、戦争防衛用の施設と考えられていましたが、最近では、ムラの区画や象徴、集団の結束、あるいは排水・除湿を目的とするなどいくつかの解釈が示されています。

千葉県では、弥生時代中期(約2,200年前頃)に環濠集落が各地に出現しますが、東京湾東岸、特に市原市周辺に集中する傾向がみられます。

西日本からもたらされた環濠を伴う文化が、房総に伝わってきた中心地あるいは玄関口として市原周辺が適地であったことを意味しているのではないのでしょうか。



草刈F区で見つかった環濠(写真上方の半円状の溝)



環濠の断面(掘られた断面形がV字形となるのが特徴)



弥生時代中期の土器

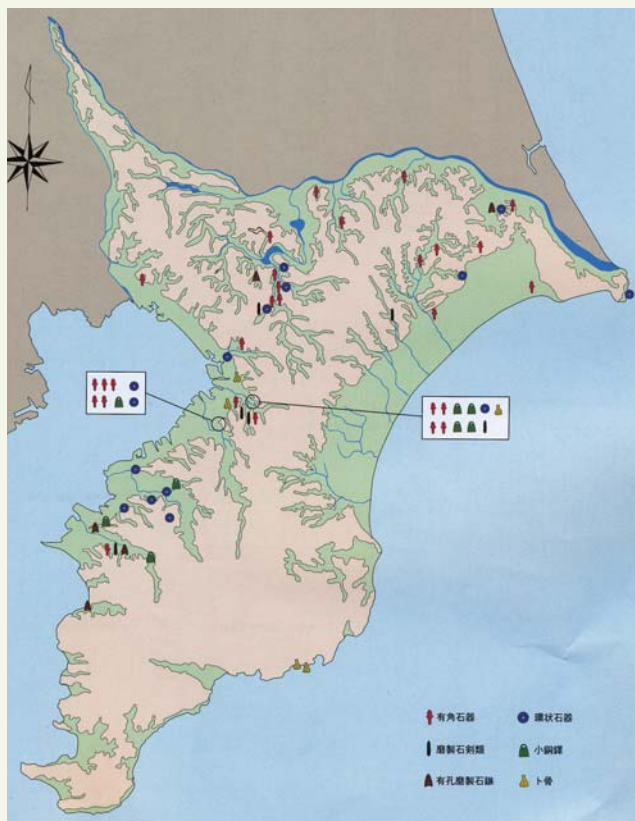


弥生時代後期の土器

【特殊遺物の分布】

草刈遺跡から出土した弥生時代の特殊遺物として、ト骨と小銅鐸があげられます。小銅鐸は、市原市から君津市にかけての東京湾沿岸にみられますが、ト骨は現状では千葉市～君津市の東京湾沿岸の集落及び勝浦市の洞穴遺跡に限られています。

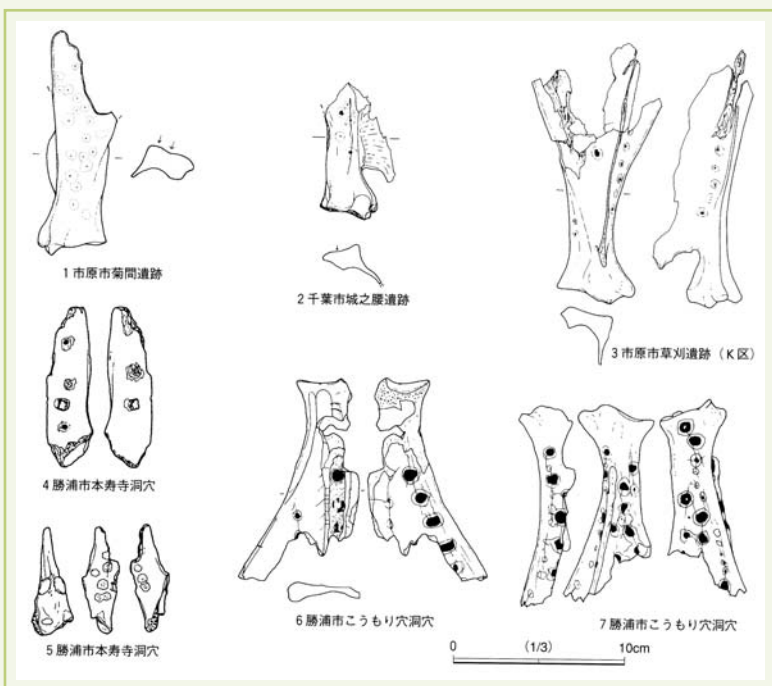
一方、有角石器や環状石器などの特殊な石器類は、下総にも広く分布しています。



特殊な遺物の分布『千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』P587より転載

ト骨を用いた占いは、稲作技術の導入と相前後して日本に伝わったものとされ、『魏志倭人伝』（中国の歴史書『三国志』中の「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷倭人条の略称）に邪馬台国の女王「卑弥呼」が「特別なことをするときは骨を焼き、割れ目を見て吉凶を占う。」と占いを行っていたことが書かれています。

草刈遺跡のト骨は、竪穴住居内の廃棄された貝層中から見つかっています。貝層からは、ハマグリなどの貝とともにウミガメやカモなどの多種の動物遺体の他、骨角器なども確認されています。この状況から、日常の食料とともにト骨が住居内に捨てられたものとは考えにくく、占いとともに行われた食を伴う儀礼の終了後に一括して廃棄されたのではないかと推測されています。



ト骨『千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』P595より転載



有角石器や環状石器は、信州を経由して関東に流入した武器形石器をモデルに、関東で独自に現れた祭祀的な石器と考えられています。全国約100例中28例が千葉県で発見されています。



川焼台遺跡1号小銅鐸



川焼台遺跡2号小銅鐸



草刈遺跡H区小銅鐸

小銅鐸は、北九州から関東にかけて分布し、全国で46例ほど出土しています。このうち8点は千葉県内からの出土で、全国的にみても小銅鐸が集中している地域です。時期的には、弥生時代の終わり頃から一部古墳時代初めにかかるものもあります。これらの小銅鐸は朝鮮式小銅鐸として製作され、ムラのマツリに用いられたと考えられていますが、中部以西にみられる銅鐸の要素も継承しており、東海地方に分布している三遠式銅鐸の製作工人が深く関わっていたとする見方もあります。

小銅鐸の出土状況が明らかなものは少ないですが、草刈遺跡H区の小銅鐸は、古墳時代前期の方墳の埋葬施設から副葬品として見つかっており、特定の人物が所有していたことがうかがえます。



小銅鐸『千葉県の歴史 資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』P594より転載

【ベンガラの入った鳥形土製品】

草刈遺跡I区の弥生時代中期の146号竪穴住居跡から出土した特殊な土製品で、内部にベンガラ(酸化鉄を主成分とする赤色顔料)の粉末が入っていました。土器などを赤く塗るためのベンガラを入れる容器として使っていたものと思われます。



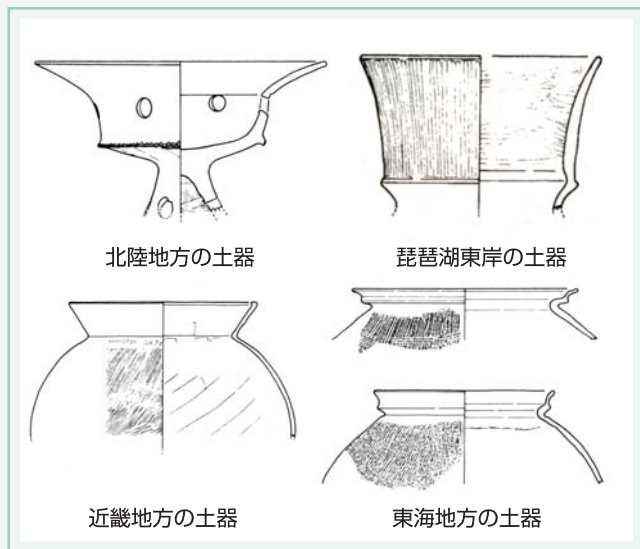
古墳時代

一人々の暮らしの変化

弥生時代後半に拡大したちはら台の集落は、古墳時代になってさらに広がりを見せています。古墳時代初め頃の大々な特徴として、当時きわめて貴重品であった青銅製の鏡の出土があげられます。この頃の千葉県内の集落では、22面ほどの鏡がみつっていますが、その半分以上の12面はちはら台の遺跡から出土しています。

古墳時代になると、小銅鐸に替わるかのように、小型の鏡が集落に出現しています。ムラのマツリや権威の印として使われたのでしょうか。この頃、北陸や琵琶湖周辺及び近畿や東海地方を起源とした土器がちはら台の遺跡から出土しています。西の文化を携えた人々の往来も推測され、そのような人の中に鏡を所有していた有力者がいた可能性も考えられます。

一方、今から1,600年前頃の古墳時代中頃には、現代の日本に通じる生活様式や新たな技術が大陸から伝えられました。ちはら台は、房総でもいち早くそれらの先進文化を取り入れた地域です。特に、「カマド」の導入は、縄文時代以来の「炉」を中心とした生活様式を一変させ、調理をする台所や作業スペースなど現代に通じる家屋内の独立した空間が生まれたのもこの頃です。



草刈遺跡C区153号住居出土 珠文鏡 しゅもんきよう



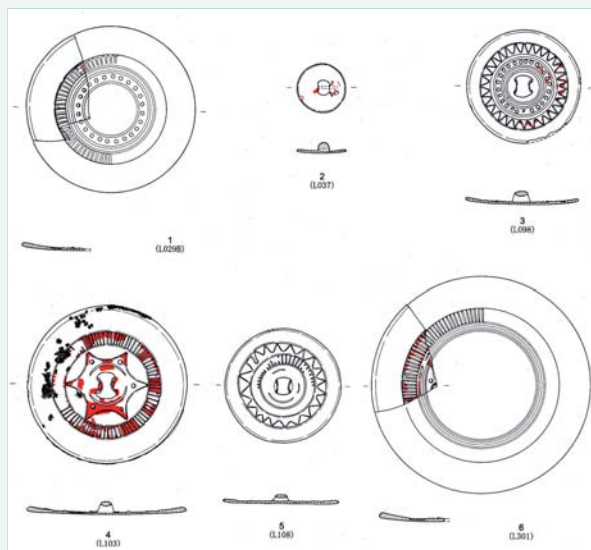
草刈遺跡K区39A号住居出土 重圏文鏡 じゆうけんもんきよう



草刈遺跡L区103号住居出土 内行花文鏡 ないこうかもんきよう



草刈遺跡C区97号住居出土 珠文鏡



草刈遺跡L区出土鏡

【各地の土器】

この頃になると、関東以西の地域的な特徴をもつ土器が房総に伝わり、特に市原市周辺に集中して見られるようになります。直接他地域から持ち込まれたものもありますが、その多くは、形や技法をまねて在地で作られています。このことから、土器を作る人々を含んだ集団が市原市周辺を玄関口として移動してきた可能性が考えられます。

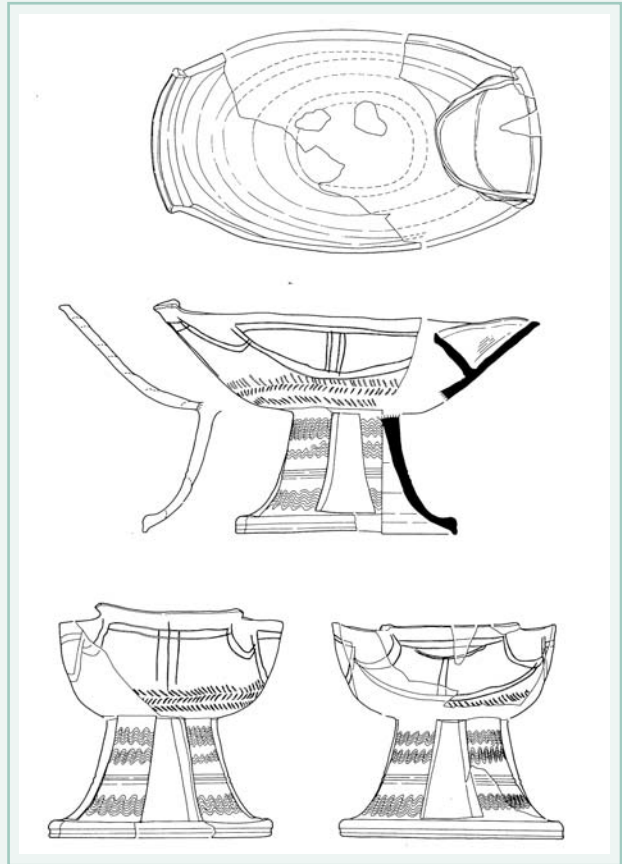




【舟の絵が描かれた須恵器】

草刈3号墳から出土した高杯たかづきで、杯の部分が舟の形に作られています。また、側面には川舟あるいは沿岸航海用の小型の船を表現したと思われる絵が刻まれています。

この須恵器の生産地は、現在の大阪と考えられ、焼成前に描かれていることから、当初から絵が刻まれた須恵器が遠く離れたちはら台の地に持ち込まれたものと思われる。



【赤く焼かれた須恵器】

古墳時代中頃には、房総で須恵器を生産した窯跡が見つかっていないため、この頃の須恵器は、大阪の陶邑窯跡すえむらで生産されたものが持ち込まれていたとみられます。草刈六之台遺跡では、須恵器の形や技法を忠実にまねて焼いた土器が出土しています。「赤焼き土器」と呼ばれ、おそらく須恵器生産の技術をもった西からの人々によってちはら台の地で焼かれたものと推測されます。



カマド使用の復元



草刈遺跡J区の初期カマド



草刈1号墳全景

【カマドの採用】

5世紀中頃、朝鮮半島からさまざまな文化が日本列島に伝わった中で、生活に大きな変化をもたらしたのが、「カマド」の採用でした。ちはら台のいくつかの遺跡から県内で最も古いカマドが見つっています。草刈遺跡J区ではカマド以前の「炉」が一緒にあり、炉からカマドへ変化したようすが見て取れます。

【約1,600年前の古墳】

草刈遺跡で調査された多くの古墳の中でも、草刈1号墳と名付けられた大型の円墳には、豊富な遺物ひくそうが副葬てつていされていました。

特に、2枚の鉄鋌てつてい（鉄製品を作るための鉄素材）と鋸は県内でも類例が少なく、貴重なものです。



草刈1号墳の副葬品



奈良・平安時代

—生産活動と仏教—

大化の改新（645年）以降、新しい国の支配を目指して律令体制が成立するようになりました。全国を約60の国に分割し、それぞれの国を「国—郡—郷（里）」という地方行政組織にまとめました。現在の千葉県は、ちほら台の北側の谷付近を境として、南を「上総」、北を「下総」と呼ばれました。ちほら台のある地域は、上総国11郡の中の「市原郡」の北端にあたります。

草刈遺跡の奈良・平安時代の集落は、古墳時代までの集落と比較するときわめて小規模となり、台地の西と東に小さくまとまって分布しています。一方、草刈遺跡の東側に位置する川焼瓦窯跡と押沼遺跡群では、当時の生産活動を示す多くの遺物が発見されました。川焼瓦窯跡では、奈良時代中頃（約1,250年前）に建立された上総国分寺の屋根瓦を供給したと考えられている窯跡1基が調査され、主に創建期の瓦が焼かれていたことが明らかとなりました。また、押沼遺跡群では、平安時代の本格的な製鉄の跡が見つっています。砂鉄から鉄の素材を作る製錬から最終的に製品を仕上げる鍛冶までの工程が遺構として残っており、大規模な製鉄工場であったことが判明しました。多くの鉄製品の中には、高度な技術を要する仏具、「獸脚付鍋」の鋳型も含まれていました。瓦や鋳型の存在は、この地が上総国分寺と密接な関係にあったことを物語っています。

【新しい技術による瓦生産】

川焼瓦窯跡では、有牀（ロストル）式平窯を使った瓦生産が確認されています。瓦の焼成は、従来の登り窯を使ったものから、8世紀後半以降、ロストルと呼ばれる炎の通り道の溝が作られ、炎が瓦にむらなく火がまわるように工夫された平窯に変化していきます。中央からもたらされた先進技術で国分寺の瓦が生産されていたようです。

上総国分寺の軒丸瓦は、単弁二十四葉蓮華文と有芯三重圏文、軒平瓦は均整唐草文と重郭文を採用しており、市川市の下総国分寺とは異なった軒瓦が使われていました。



川焼瓦窯出土軒丸瓦
(単弁二十四葉蓮華文)

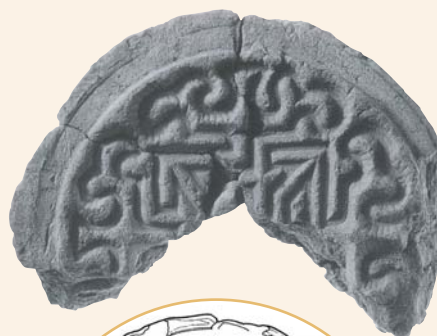


上総国分寺の軒丸瓦と
軒平瓦

【不思議な模様】

川焼瓦窯跡の近くにある川焼台遺跡から発見されたもので、用途は明らかではありませんが、柱の上に横にかけた丸い桁材の先端にかぶせて装飾性を持たせたような特殊な瓦の可能性もあります。もう一つの用途としては、「時香盤」と呼ばれる一種の時計が考えられます。模様の溝の中に粉状のお香を巡らせ、それに火を付けてその燃えた長さで時を測るものです。

いずれにしてもほとんど例のない特殊なものであることは間違いありません。



復元図



【押沼第1遺跡K地点の製錬炉】

古代の製錬炉せいれんろには、西日本を中心とした箱形炉と東日本に広がる竪形炉たてがたの2種類があり、東日本では初期に箱形炉が導入されますが、短時間で竪形炉に変化していきます。この遺跡では7基の製錬炉が見つっていますが、写真は其中最も大きな竪形炉です。奥の炉部分は長さ1mほどで、手前には幅約3mの作業場そうぎょうが存在しています。操業された時期は、9世紀後半から10世紀初め頃と考えられています。



押沼第1遺跡の各種鋳型

【獣脚付鍋の鋳型】

鋳型い がたとは金属製品ちゆうそくを鋳造する際に用いる型で、外型と内型の間に溶かした金属を流し込んで製品を仕上げしていきます。



【東海地方の灰釉陶器】

草刈遺跡K地点から出土した浄瓶じょうべいです。もともと浄瓶とは、僧侶が用いる飲料水や手洗い水などの容器として用いられた「仏具」でしたが、儀式用の器として重宝されていたようです。



【青銅の箸】

草刈遺跡G区から見つけた佐波理さ は り（銅と錫の合金）の箸はしです。高級な仏具の一つで、火葬墓から出土しており、仏教に関係した高い位の人葬られていたものと考えられます。



【寺を指す墨書土器】

草刈遺跡D区から見つけた土器で、器の外側に「草刈於寺杯くさかりのかみのでらつき」と書かれていました。奈良時代にこの地が草刈と呼ばれていたことが明らかとなり、その地名は現在まで引き継がれています。

調査研究発表会

当日先着受付／200名

平成25年2月2日(土)
午前10時30分～午後3時
会場／千葉県立中央博物館

※詳細についてはお問合せ下さい。



UR都市機構ホームページより転載



草刈遺跡J区



堂坂公園周辺 (ちはら台西2丁目)

千葉県立房総のむら

平成24年8月4日(土)～9月17日(月)・(祝)

千葉県立関宿城博物館

平成24年11月29日(木)～平成25年1月6日(日)

市原市埋蔵文化財調査センター

平成24年10月17日(水)～11月25日(日)

千葉県立中央博物館

平成25年1月12日(土)～2月24日(日)

●発行日：平成24年8月2日

●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団 〒284-0003 四街道市鹿渡809番地の2

●印刷：株式会社ニッセイアド